ルター新聞
Die Luther Zeitung
ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr. 67

LWFユナン議長（左から2人目）とフランシスコ・ローマ教皇（左から3人目）
共同司式による合同礼拝（2016年10月31日、ルンド大聖堂）

500年目の宗教改革はエキュメニカル！

考えられない進展――共同礼拝

教会を決定的な分裂に導いたと思われた宗教改革。今からちょうど五百年前、一五一七年十月三十一日にドイツのウィッテンベルク城教会の扉にルターが「九五箇条の提題」を貼り出したと言われている出来事に端を発し、激しい論争と相互非難の応酬のあと、共に天を戴かない状態になっていました。それが、なんと、昨年十月三十一日、スウェーデンのルンドでヴァチカンとルーテル世界連盟（LWF）が宗教改革五百年を記念して、共同礼拝を行ったのです（写真）。

和解へ、そして共なる宣教と奉仕へ

五十年間にわたる神学的対話からあの『義認の教理に関する共同宣言』が生まれ、『争いから交わりへ』に繋がり、それに基づき今回の「共同礼拝」がついに可能になったのです。日本でも今年十一月二十三日に長崎の浦上天主堂でカトリック教会と日本福音ルーテル教会の平和のための共同礼拝が開催されます。

ルターと宗教改革の真の意義を学ぼう

この記念の年に、各個教会、教区・地区、全体教会・教団レベルでさまざまな特別行事が持たれます（大学神学校と教会側の記念行事カレンダーを参照）。大学・神学校の催しが目白押しです。「講壇奉仕」もあります。さらにルター研究所も「信徒と牧師のためのルター・セミナー」「秋の音楽と講演の会」を主催します。出版物も揃いました。ぜひご参加ください。

（江藤直純）

今号の内容

2面　『「キリスト者の自由」を読む』発刊
3面　「信徒と牧師のルターセミナー」案内
　　書評『ルターにおける聖書と神学』
4面　昨年の「ルターセミナー」感想
5面　エリクソン『青年ルター』
　　切手シリーズ「ミュンツァー他」
6面　『キリスト教における死と葬儀』
　　ルターこぼれ話「ルターとイソップ」
7面　ルターとクラーナハ
　　ルター関連グッズ販売
8面　研究所ニュース

『「キリスト者の自由」を読む』、ついに発刊！

（ルター研究所編著、リトン、一〇〇〇円）

古典中の古典の最良の入門書

『キリスト者の自由』といえばルター、ルターといえば『キリスト者の自由』。まさに『キリスト者の自由』はルターの代名詞といってもよく、古典中の古典です。キリスト教二〇〇〇年の歴史の中で最も有名な書物トップ5の中の一冊でしょう。

その『キリスト者の自由』の入門書、わかりやすい解説の本が、ついに出版されました。題して『「キリスト者の自由」を読む』。一人で読むも好し、また教会などでの勉強会用にグループで読むも好し。ともかくルター研究所の総力を挙げて造り上げた本です。乞うご期待。

ルーテル教会では、宗教改革五〇〇年の記念事業の一つとして四冊の本を読もうと呼びかけてきました。『マルティン・ルター』（徳善義和著）、『エンキリディオン小教理問答』、『アウグスブルク信仰告白』ときて最後の一冊が本書『「キリスト者の自由」を読む』です。いよいよ今年は五〇〇年の年、ルターを学ぶ、絶好の年です。

二つの誤解

さて、では『キリスト者の自由』とは、どんな本なのか。実は全く間違いではないのですが、やや誤解されていることが、二つあります。一つは、自由についての本だと思われている事、そしてもう一つは、手軽に読めるやさしい本だと思われている事。やや誤解です。

まず第一。『キリスト者の自由』は、自由論というよりも、実は自由という切口で、いやより正確にいえば、自由と愛という切り口で、人間の救いとは何か、あるいはキリスト者の人生・生き方が説かれている本なのです。自由でノビノビ、などということが書かれているのではなく、人間の救い、人生いかに生くべきか、について書いてある書物なのです。いわばルターによる人間論なのです。

謎のような二つのテーゼ

この事を説くために、ルターは冒頭にあの有名な二つの謎のようなテーゼを掲げます。

「キリスト者は、すべての者の上に立つ自由な君主であって、だれにも服しない」

「キリスト者は、すべての者に奉仕する僕（しもべ）であって、だれにも服する」

開口一番、矛盾したことが書いてあります。謎です。

この謎を解くために、ルターはこの本の前半部で「自由な君主」、つまり自由について説いていきます。どんな事が説かれているのか。一言でいえば、人間の救い、その結果としての魂の自由、つまり信仰義認の問題が懇切丁寧に説かれています。そして後半部では「奉仕する僕」、つまり愛（奉仕）について説かれています。私たちが現実の人々の中でいかに行為を積み重ね生きていくのかが、これまた丁寧に説かれているのです。

さて、誤解の第二。『キリスト者の自由』はやさしい書物であるという誤解。誤解です。実はかなり入り組んでおり、一読して頭がスッキリするというわけにはいきません。なぜなら、この本にはいわばルターの信仰と思想のすべて、ルターの真髄が書き込まれているからです。手ごわい書物です。

しかし、だからこそよけい読みたい、読むべきだ、読まねばならぬ、という気持ちがわいてきます。では、どうしたらよいのか。なにか親切な、しかも簡潔な手引きがほしい。

と言うわけで、ルター研究所では、その手引きの本をつくりました。それが本書『「キリスト者の自由」を読む』です。

三つの狙い、六つの解説

本書には三つのねらいがあります。ルターの本当の考えを知るという事、現代という視点で読むという事、そして一人でもグループでも学習するのに適した本であるという事。

本書は次のように構成されています。まず『キリスト者の自由』の抄訳（徳善訳）。次に全体の説明が簡潔になされます。そして、いよいよ詳しい内容の解説ということになりますが、そのために主要な六つのテーマを設定して解説していくこととなります。

六つの主要テーマとその筆者は次の通りです。自由（江口再起）、律法と福音（立山忠浩）、信仰義認（鈴木浩）、全信徒祭司性（石居基夫）、信仰と行為（高井保雄）、愛の奉仕（江藤直純）。

最後に座談会「二一世紀に『キリスト者の自由』を読む」が収録されています。五〇〇年前の書物を、今を生きている私たち現代人の視点で読む。古典を読むときの大事なコツでしょう。という具合に、内容満載。ぜひ手にとり実際に読んでいただきたい一冊です。

（江口再起）

宗教改革500年記念

今年は信徒と牧師のためのルター・セミナー

「500年の年、ルターに出会う！」

初めから学び直し、共に語り合い、深く考えよう!!

●内容・プログラム

1．ルターの生涯
2．「95ヶ条」を学ぶ
3．宗教改革時代の美術
4．ルターと聖書
5．カトリック教会とルーテル教会のエキュメニズムの流れ

その他、**質問コーナー**の時間、**話し合い**（私とルター／信仰とは……）、**音楽鑑賞**（メンデルスゾーン「交響曲・宗教改革」）など。

＊美術は真下弥生先生、それ以外はルター研究所所員がそれぞれ担当します。

●日　時　2017年　6月5日(月)午後3時～
6月7日(水)正午まで、昼食後解散

●場　所　マホロバ・マインズ三浦（神奈川県三浦市）
京浜急行・三浦海岸駅、徒歩5分
（品川から約60分、羽田空港からは＋10分）

●費　用　2万5千円
（宿泊、食事、資料代込み）

●申し込み方法
ルター研究所まで下記のいずれかでお申し込みください（電話は不可）。
メール　neto@luther.ac.jp、FAX（0422）33－6405
はがき　181-0015 三鷹市大沢3-10-20
ルーテル学院大学ルター研究所苑
4月末日必着（定員に達したら締め切ります）

●定　員　60名

書評

『ルターにおける聖書と神学』

（上智大学キリスト教文化研究所編、リトン、二六〇円）

高井保雄

今年（二〇一七年）はルターの宗教改革五百周年となっている。宗教改革は西方教会に於いてカトリックとプロテスタントの分裂をもたらしたとされるのだが、五百年後の今日、全キリスト教会は、教会一致運動（エキュメニズム）の最中にある。それは一九六〇年代の第二バチカン公会議以後本格的となったのだが、本書は、その運動から生まれた数多くの豊かな共同作業における果実の一つである。「ルターにおける聖書と神学」というテーマを、カトリック教会に属する研究所が、四名のプロテスタントと一名のカトリックの執筆陣で構成、出版したという事自体が、それを何よりも雄弁に物語っている。

各論題の内容は、聖書講座の講演を元にしたからか、大変解りやすく、しかも今日におけるキリスト者として、もう一度「ルターにおける聖書と神学」について、まとまった理解をしておきたい読者にとっては、見過ごせない知見に満ちている。

内容を順挙すると、①ルーテル教会に属する牧師として原発問題に取り組む現場からの、ルターの二王国論に関する再考察と再評価（内藤新吾氏）、②ルターの二度にわたる詩編講義における聖書解釈の特質とその深まりが、「神の義」についての新たな理解に到達し、宗教改革に結実したこと（竹原創一氏）、③二〇一七年にドイツ聖書協会が出版しようとするルター訳聖書の新たな校訂版の持つ今日的意味についての考察（吉田新氏）、④プロテスタントの「聖書のみ」とカトリックの「聖書と伝統」という、これまで相容れないと思われていた聖書の理解への両者の原理的対立を、「聖書」と「伝統」という二項的理解を超えて、キリストの福音という源泉から新たに捉え直し、この地平から両者の和解と一致を説くもの（川中仁氏）、⑤第一回詩編講義において、ルターは、詩編三十一の文言「あなたの義によって私を解放して下さい」という箇所に躓いた。彼は「神の義」を、罪を追究し、罰せずにはおかない神の法廷的正義と捉えていたのだが、ここから、人間を解放する「神の義」という福音的理解が見出され、ついにルターの宗教改革の神学が確立されるに至る（鈴木浩氏）という順序で、まとめられている。

特に、竹原氏の、ルターの詩編講義におけるヘブライ語の理解の深化に伴う「神の義」の新しい理解の照射と、鈴木氏のルターの「神の義」の実存的理解の照射がぴたりと重なり、文字通り本書のハイライトとなっているところが感銘深い。

（ルター研究所所員）

参加者は語る

福音を生きる

湯川　郁子

セミナーのテーマは『キリスト者の自由について』でした。矛盾するかのような二つの命題で始まるこの書をかつて学ぶ機会を得た講読会での感銘と、そこで共に学びすでに逝かれた友人たちを懐かしく思いだします。開会礼拝で、遠い教区からも集まられた多くの牧師先生方の賛美歌のお声が響いてくると、いつも私は温かい思いに満たされます。

二日目には、近く出版の『「キリスト者の自由」を読む』に備えてこの書をいくつかに分け、その部分の主題（自由、信仰と行為、律法と福音、全信徒祭司性、信仰義認、愛の奉仕）に沿って所員の先生方がわかりやすく発表され、全員がそれをもとに話し合いました。宗教改革五百年を控え、「私たちは現在の生活にこの書をどう用いるか」が課題であり、質疑応答や具体的な問題に触れての討論も活発で充実した時間でした。

今回、私は第一八の「キリストを説教する」に引かれました。ここは前半の「神の言葉が魂を自由にする」という第五、第六の要点をまとめつつ、第二六、第二七の後半の山場へと導く橋渡しのようになっています。昔イエスがガリラヤの民衆に語られたとき聞いた人々に何かが起こったように、いまもキリスト「について」ではなく、キリストが真の意味で語られるなら、私たちそれぞれにも同じことが起こって新しい体験をすることになり、それをまた隣人に伝えることが出来るのです。

この書については前半の「キリスト者の自由とは何か」の解説が多いのですが、「その自由を得た私たちはどう生きていくのか」という後半で語られていることが、今回の学びの中心になりました。福音について思弁的なことを頭の中で繰り返すのではなく、複雑な問題を抱え次々に報道される悲惨な出来事に驚かされる日々の中で、福音を生きるとはどういうことなのでしょうか。出席者の日々の体験の中から様々な問題が提起され、気付かなかったことを考える糸口を頂きました。ルターも当時の辛苦災害に直面し、困難の中で祈りながら福音を生きた人でした。『キリスト者の自由について』に潜む知恵は奥が深く、読みつくせませんが、触れるごとに新しい力を得られるのが古典であり、時代を超えて生きるのでしょう。『「キリスト者の自由」を読む』出版準備のためのよいセミナーに参加させて頂きありがとうございました。（市ヶ谷教会員、ルター研究員）

昨年（二〇一六年）のルターセミナーでは徹底して『キリスト者の自由』を学びました。

ルターの自由と現代日本の自由

藤江　健

ルターは『キリスト者の自由』の前半の命題において、信仰によって義とされた私たちが律法の縄目から自由とされ、もはや何事にも何者にも拘束されず解き放たれていることを説いている。されば、牧会の現場で従事する私も、常に十字架のキリストを示しながら、一人一人の魂が福音にある自由のうちに生かされてゆくことを旨としてきたつもりである。

しかし、本セミナーで考えさせられたことの一つは、ルターの言わんとしている自由と、現代日本で通俗的に考えられている自由との間に隔たりがあるということである。ルターの言わんとしている自由とは、恩寵によって与えられる受動的な性質のものであるが、世間一般における自由は、自らの意志と行為によって到達・成就されるとの認識が占めていよう。ここには、説教や牧会において自由を示してゆく上での課題が提起されているように思われる。

他方、ルターは後半の命題において、自由を得た私たちが全ての者に隷属して奉仕することを説いている。これは、前半の命題（自由）と矛盾するのではない。律法の縄目から解かれた私達は、奉仕への自由に導かれるのであり、この受動的能動性こそ、まさに『キリスト者の自由』の根本的特質であり、私たちを喜ばしき自発的な愛のわざへ駆り立てるのである。但し、「奉仕への自由」という感覚は、この日本ではなかなか理解されにくいものであって、説教や牧会でどのように示してゆくか課題があるように思われた。

ちなみに、私は信徒から次のような声を聞いたことがある、「キリスト者のなすべきわざについて、ルーテル教会は具体的に教えてくれない」と。いわく、律法の第三用法に関わる事柄である。けれども、キリスト者のなすべきわざを普遍化・条文化した途端、どのような問題が生じるか、まさに自明ではないか。この点、本セミナーの中で「モーセの律法からキリストの律法へ」（福音に裏付けられた律法へ。第三用法の位置）という整理や、「ボランティアとディアコニアの違い」（後者は受動的能動性から発せられる）といった整理を幾分でもなせたことは、私にとって有意義であった。

また、今回のセミナーでは、二〇一六年十月発行予定『「キリスト者の自由」を読む』の草稿を前に、執筆者（所員）と参加者の意見交換がなされたことも、興味深いところであった。（西日本福音ルーテル吉野川・小豆島教会牧師）

ルター研究の名著シリーズ

E・H・エリクソン『青年ルター』

副所長　江口　再起

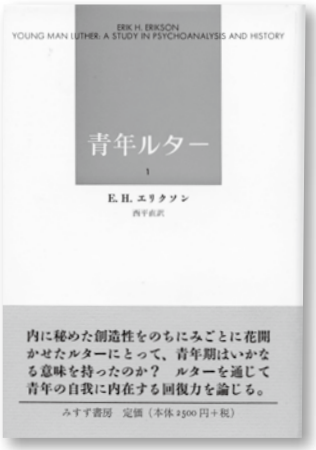
異色のルター研究である。その名も『ヤングマン・ルター（Young man Luther）』。原著は一九五八年、その後邦訳も出版されたが、日本の神学界ではおおむね不評であった。うまく咀嚼できなかったのである。しかし実は、相当に深みのある研究書である。

著者エリクソンはドイツ生まれのアメリカで活躍した精神分析家。戦後最も成功した知識人といわれ、「アイデンティティ」という、今では誰もが知っている言葉の生みの親。

さて『青年ルター』の副題は「精神分析学と歴史学における研究」となっている。精神分析心理学による個人の発達の研究と、歴史学による社会の変動の研究を相互乗り入れながらルターを伝記的手法で描き出す。この研究法には批判もある。精神分析を施すのであるから、それではまるで神経症患者ルターのようではないか、という批判。しかしそれは誤読である。読みおえて浮かび上がるのは、信仰の実存に最も真剣に生きた人ルターである。

内容は、父ハンスと息子マルティンとの葛藤が軸となる。いわゆるエディプス・コンプレックスである。幼年期、落雷体験、修道院での苦悩、塔の体験、そして中年の危機等々が、実に興味深い分析やエピソード（たとえば塔の体験の場所が便所ではなかったか？）を交え論じられていく。修道院入りに反対する父ハンスの背後に、「怒りの神」を感じる息子マルティンは、やがてその修道院そのものを解体することによってパパ（教皇！）と対決、歴史そのものを大きく動かし、「ゆるしの神」を見出す……。

エリクソンは本書のエピローグに謎のようなことを書いている。「信仰の三つの源泉」として三つのことを挙げる。母胎、父の声、無。無条件で受け入れる事、導く事、そしてそういう神と一つとなる純粋な自己という事であろうか。読む者をして深い思索にいざなう書物である。（『青年ルター』1、2、西平直訳、みすず書房）



切手に見るルター ㉓

農民戦争、トマス・ミュンツァー

大分・別府・日田教会牧師　野村　陽一

1525年、農民戦争がドイツ・テューリンゲンに飛び火し、その中心的人物がトマス・ミュンツァーだった。意識の高まりから社会変革を求める農民たちに、ルターの宗教改革運動は大きな影響を与えたと言われるが、ドイツ神秘主義の影響濃いミュンツァーはルターとは異なるタイプの宗教改革者だった。

ルターは当初こそ農民に理解を示すが、その急進的暴力的闘争に警告を発するに至る。これで我が意を得た領主たちの一方的農民弾圧をみるや、今度は農民にも一理あるとの文書を出す。中途半端な対応と言われても仕方ない。

旧東ドイツでは、ミュンツァーは社会的英雄としてプロパガンダに利用された節がある。切手は三度にわたり発行され、紹介するのは、二度目の発行、1975年の農民戦争450年を記念するものである。ミュンツァーの肖像画をはじめ、農民戦争の各場面が描かれている。

『キリスト教における死と葬儀
――現代の日本的霊性との出逢い――』を出版して

所員　石居　基夫

修道院に入り、聖書と神学に深く通じて宗教改革者となったマルティン・ルターにとって、一番の問題が「死の問題」であったということはしばしば指摘される。誰にとっても自明のことでありながら、ひとたび自分の問題となれば、それは恐ろしい形相で私たちの魂を揺さぶる。ルターはまさに実存的に自分の死の問題に向かい合わざるを得なかった。ペストの流行や繰り返される飢饉が死を身近なものとしたことと、またルター自身の死を間近にする個人的体験にもよるだろう。

そして、このルターの死の問題との格闘は、当然のことながら、中世のキリスト教的世界の中で起こっていく。死をどのように理解するか、その恐怖からどうやって逃れうるのか。考える道筋は、当時の教会の教えに基づくものだった。その中でルターは、その教えによってはどうしても平安を得られず、聖書に立ち返り、福音の深い真理に導かれたのだ。

ルターの神学は、「十字架の神学」とか「信仰義認の教理」にその特徴が表されるが、その一番深いところには神学的理屈があるのではなく、ルターが死の問題と格闘して得られた神の福音の喜びがある。それは、同時代の人々にどうしても分かち合われる必要のあった、神のことばとの邂逅の喜びであろう。だからこそ、その彼の表現は、宗教改革という時代を切り開いていく運動となったのだ。

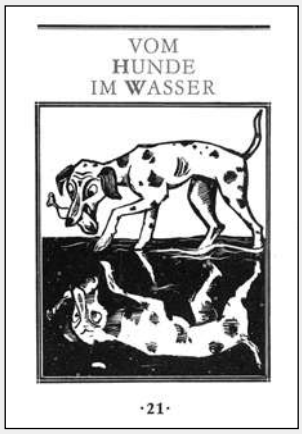
拙著は、現代日本という土壌で死の問題と向かい合う私たちにとって福音の喜びとはなにか、牧師として信徒の皆さんと共に学んできたことをまとめさせていただいたものだ。ルターがそうであったように、現代日本に生きるキリスト者として、神のことばの力を具体的な教会の脈絡のなかに確認することができればと願っている。看取りや悼みの体験、また自ら死を見つめる経験のなか、神のことばが私たちを慰めと希望へと導く。教会の交わりのなかでこそ、この神の出来事が体験されるに違いない。

「死と葬儀」の問題をとおして、私たちを生かす福音の喜びを今一度確認していきたいものだ。教会での学びに用いていただければ、感謝に堪えない。（キリスト新聞社、二〇一六年、一八〇〇円）

ルターこぼれ話

ルターとイソップ

江口　再起



情報過多。本屋に行くと本の洪水。あまり多すぎてかえって本を読まなくなる。昔はそうではなかった。まして五百年前のルターの時代。聖書一冊が仔牛一頭の値段とか。人々は書物を大事に大事に読んだ。

では、どんな本を読んでいたのか。ルターが亡くなった時、机の上に一枚の紙片が残されていたが、そこには田園詩を書いたローマの詩人ウェルギリウスやローマの文人政治家キケロの名前がメモ書きされていた。ルターの時代の人はそういう骨太な古典を読んでいたのである。

そんな中、ルターがこう言っている。

「イソップの本が残されているのは、天の配剤だ。聖書を除けば、イソップこそ他の哲学や法律書にまさって私を喜ばせる」。

イソップは紀元前六世紀ごろのギリシアの人。動物を主人公にして、人生の機微をとらえた寓話集を残した。日本でもキリシタン時代、宣教師たちは説教の補助教材として『天草本伊曽保物語』を翻訳出版している。

ルターはイソップをとても愛読し、『キリスト者の自由』にも、肉をくわえた自分の影が映っている水に飛びついた貪欲な犬の話がでてくる。いや、このように著作の中で例話に使うどころか、ルター自身、「ロバとライオン」や「町の鼠と田舎の鼠」などイソップ物語そのものを再話し、話のポイントを書きそえた『イソップ寓話集（Etliche Fabeln aus Aesop）』を一五三〇年に出版さえしているのである（WA・50）。当時、わが子が四～五才だったので、子煩悩だったルターは、きっとそれらの寓話を読み聞かせていたにちがいない。

＊そのルターの『イソップ寓話集』の中からいくつかを日本語で読むことができる。W・シュパンが編集した『ルターの言葉――信仰と思索のために』（湯川郁子訳、教文館、二〇一四年）に十三の物語が収録されている。（ルター研副所長）

ルターとクラーナハ

田中　博二

昨秋、上野の国立西洋美術館にて「クラーナハ展」が開催された。宗教改革五百年を銘記して副題「五〇〇年後の誘惑」とある。宗教改革の中心地ヴィッテンベルクを舞台として、同時代に活躍した二人の男、ルターとクラーナハ。

マルティン・ルター、宗教改革の立役者。ヴィッテンベルクに新設された大学の聖書の教師、アウグスチヌス派の修道士。生涯を通して聖書の博士を全うした。

ルカス・クラーナハはザクセン選帝侯の宮廷画家として有力な地位を占めていた。ルターより九歳上の一四七二年、ドイツ・フランケン地方のクローナハにて誕生。生家は画家の家系。クラーナハはデューラーの影響を受け、ウィーンでの経歴を経てザクセン選帝侯の宮廷画家に就任。ヴィッテンベルクに移り住んでからのクラーナハの活躍ぶりはめざましい。当時の宮廷画家は今日の芸術家というよりも、数多くの弟子を抱えた工房の経営者のよう。その働きは宗教画、肖像画、銅版画などの枠をはるかに超える。ザクセン選帝侯の宮殿の調度品、衣装、祝祭用の装飾。城塞を建築し、メダルを作成するなど細々な事柄。彼はあたかも宮廷の代理人のように諸事万般を取り仕切る。

しかし一五二〇年を境とし、クラーナハにとって別の大きな活動の領域が登場する。それがルターとの出会いであり、ルターの著作を製作発行する企業家としての活動である。一五一七年のルターによる「九五ヶ条の提題」を契機として、宗教改革運動が開始され、数多くの文書が発行された。クラーナハの工房からも、初期の代表作「キリストと反キリスト者の受難」が製作された。また、よりプロテスタント的信仰を強調する聖画「キリストと姦通の女」「幼児たちを祝福するキリスト」など表現していった。ルターとカテリーナとの結婚を表出する対幅肖像画などあげられる。

ルターは一五四六年、誕生の地であるアイスレーベンにて六十二年三ヶ月の生涯を閉じる。同時代を生きたクラーナハは、七年後亡命の地ワイマールにて没し、八十一歳の人生を終える。ルターとクラーナハの二人の篤い友情と共に、彼らが指し示した豊かで清明な喜びの世界に出会うことは幸いなことである。

（引退牧師）

教文館４Ｆ「エインカレム」より

ルター関連グッズのご案内

この度、ルターが聖書を翻訳したヴァルトブルク城（世界遺産に登録）にあるアイゼナハ・ヴァルトブルク売店からオリジナルグッズを直輸入しました。同売店では、世界中のルター関連グッズを取り揃えるとのこと。当店でも厳選して紹介します。

グッズの内容としては、カード、鉛筆、ボールペン、キャンドル、バッグ、マグネット、定規、ステッカー、キーホルダー、メガネケース、メガネ拭き、ピンバッチ、しおり、マウスパット、胸像……そして好評のプレイモービル「マルティン・ルター」フィギュアなどを用意しています。左記のe-shopにてルターグッズのラインナップがご覧になれます。http://shop-kyobunkwan.com/category-4049/

３Ｆキリスト教書コーナーでルター関連の書籍も用意しています。皆様のご来店をお待ち申し上げております。

研究所ニュース

四九九年目～五〇〇年目のルター研究所

所長　鈴木　浩

●公開講座（二〇一六年後期）

後期には「ルーテル教会」（江藤所員担当）と「ルター原典講読（ラテン語）」（鈴木所長担当）が行われた。「ルーテル教会」は、宗教改革五〇〇年を前にして、教会が教会である本質を探っていき、カトリック教会との一致点と未達成の課題を明確にした。「ルター原典講読」の方は、『創世記講義』の一五章の講読が終わったので、一六章に入った。

●牧師のためのルターセミナー

いつものマホロバマインズ三浦を会場に、六月六日（月）から八日（水）まで開かれた。テーマは『キリスト者の自由』である。この時の講演は『ルター研究』別冊四号（二〇一六年十月三十一日発行）に掲載されている。

掲載内容

- 人間論としての『キリスト者の自由』
- ルターにおける自由の概念について
- 「すべてのものの上に立つ自由な主人であって、同時にすべてのものに仕える僕」
- 『キリスト者の自由』における「律法と福音」……ルター派の弱点？
- ルターにおける「善い行い」再考
- 教会とキリスト者の自由

他に徳善前所長の特別寄稿、「キリストにある自由と愛を説いて……Freiheit（フライハイト）とlibertas（リベルタス）」も掲載されている。

教会でまとめて注文しない場合には、メールかファックスで直接ルター研究所にお願いします。メールでは、hsuzuki1945@yahoo.co.jp宛に、ファックスでは0422-33-6405宛にお願いします。値段は送料込みで二千円です。

●『「キリスト者の自由」を読む』

なお、『キリスト者の自由』を読む手引き書として、『「キリスト者の自由」を読む』（教会推奨図書四冊目）がそれに先だってリトンから出版された（税別千円）。これで、教会推奨図書（四冊）が全部揃ったことになる。

●秋の講演会

会場は日本福音ルーテルむさしの教会で、一一月一三日の日曜日に行われた。講演者は、鈴木所長と石居所員であったが、六月に行われた「ルターセミナー」での発題が中心になっていた。

●一致に関するルーテル・ローマ＝カトリック委員会

昨年は、バチカンがホストになってロンドン近郊のカトリック施設で七月一三日から二一日にわたって行われた。この委員会は今回が四九回目、宗教改革五〇〇周年にあたる今年は、五〇回目となる。

●一〇月三一日の合同礼拝

バチカンとルーテル世界連盟（LWF）は、ルーテル世界連盟の発祥の地、スウェーデンのルンドで、「宗教改革五〇〇年」の記念行事の一環として合同礼拝を行った。この礼拝では、カトリック教会のフランシスコ教皇とLWF議長、総幹事が司式をした。スウェーデン教会（ルーテル）とカトリックのストックホルム教区も協賛団体として名を連ねている。一日だけのイベントであるが、カトリック、ルーテル以外の諸教会の代表も招かれていた。

●マッケンジー教授、退任帰国

惜しまれながら、二十八年間の宣教師生活、十三年間に及ぶ大学・神学校での歴史神学教授としての働きを終えて、ティモシー・マッケンジー教授が今年三月末でアメリカに帰ることになった。ルター研究所の所員としても研究と教育、教会での講演で大きな貢献をしてきた。

●『エンキリディオン小教理問答』初版（二〇一四年刊）に一行欠落

新しい訳文でルター研究所から出版され、広く読まれていましたが、一行だけ欠落がありましたので、お詫びします。左記の通り挿入してください。なお、再版はすでに訂正されています。

【初版本・四〇頁、主の祈り・第五の願い　答えの二行目。傍線部の一文を挿入】

答え　私たちはこの願いにおいて、天の父が私たちの罪に目を留めず、またこの罪のゆえに、このような願いを拒まれないようにと願うのだ。かえって神が私たちにすべての恵みを与えてくださるようにと（祈るのだよ）。なぜなら私たちは……

●ルター研究所指定後援会献金のお願い

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（一〇〇万円）と皆さんのご支援（およそ一五〇万円）で成り立っています。同封した後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研）」という欄にご記入いただけば、そのまま「賛助会費」として計上されます。五〇〇年に向けてルター研究所の責任も大きくなっています。皆さまのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

特に、本年は五〇〇周年関連のイベントが軒並みに続くので、格別のご支援をお願いいたします。（所長　鈴木浩）

ルーテル学院・ルター研究所
三鷹市大沢三―一〇―二〇
電話〇四二二―三一―四六一一
編集発行人　鈴木　浩